

ニラ白斑葉枯病の防除対策

園芸試験場

1 取り上げた理由

近年、本県のニラ栽培はハウス促成栽培の増加に伴いニラ白斑葉枯病の発生が目立ってきている。そこで、本病の発生と防除対策について検討したところ成果が得られたので参考資料とする。

2 参考資料

- 1) ハウス促成栽培におけるニラ白斑葉枯病の発生は、平均気温10 前後の低温下でも確認され、生育後期になるほど発生は多くなる(図 - 2)。
- 2) マルチ資材を使用し、刈捨後にチオファネートメチル剤(商品名: トップジンM水和剤)の灌注(3 l / m²)を行うことにより、高い防除効果が得られる(図 - 1)。

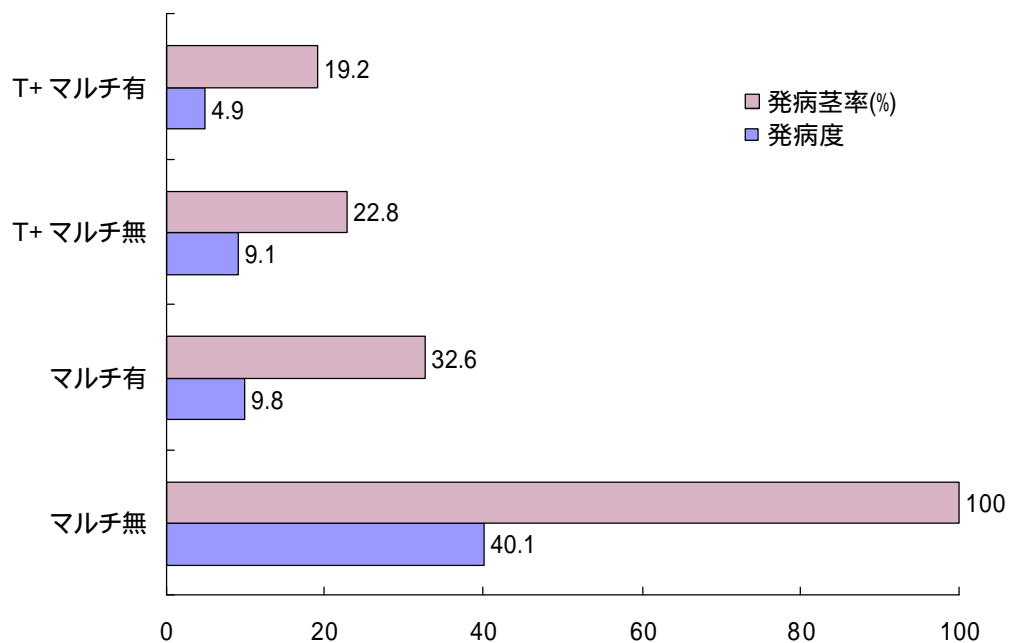


図 - 1 マルチ資材の有無によるニラ白斑葉枯病の発生状況(刈捨30日後)
T: チオファネートメチル剤(1,000倍液)灌注

3 利活用の留意点

- 1) ニラ白斑葉枯病の病原菌は3種類確認される。主要病原菌*Botrytis squamosa*は、ネギ属植物にのみ寄生するので、栽培圃場周囲にネギやタマネギ等は栽培しない(図 - 3)。
- 2) ニラ白斑葉枯病原菌の1種である*B. cinerea*(各種植物の灰色かび病菌)は、登録薬剤「チオファネートメチル剤」に対して耐性菌の存在が確認されているが、効果が劣る園地ではすでに耐性菌が発生している可能性があるので使用を控える(図 - 4)。
- 3) 品種により発生程度が異なる(図 - 5)。
- 4) 周辺で他の作物に灰色かび病の発生が見られる場合は、本病の伝染源となるのでその作物の防除を実施する。
- 5) ハウス促成栽培では、ハウス内の換気が不十分であると発生しやすい。

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間

新規発生病害虫発生生態の解明と防除法確立に関する試験 (平成10~12年)

2) 参考データ

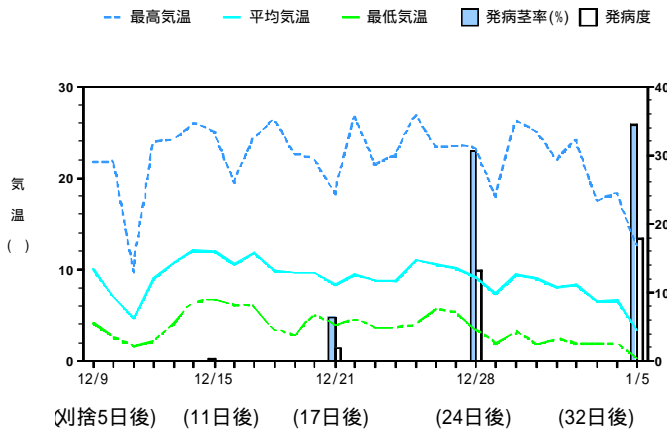


図 - 2 ニラ白斑葉枯病の発生と温度推移 (H10/12/9~H11/1/5, 品種「海南」)

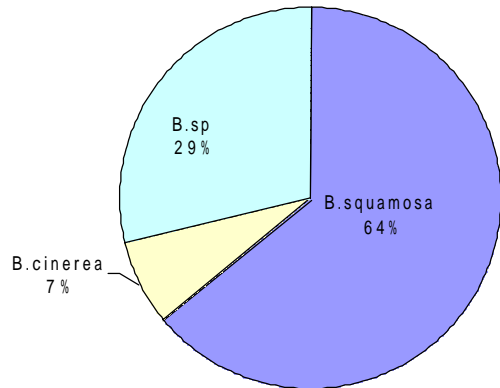


図 - 3 ニラ白斑葉枯病菌の割合 (B.sp.はB.squamosa に類似)

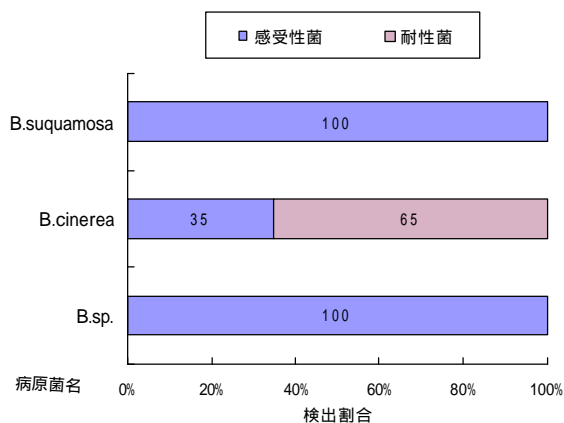


図 - 4 病原菌別のチオファネートメチル剤に対する耐性菌と感受性菌の割合

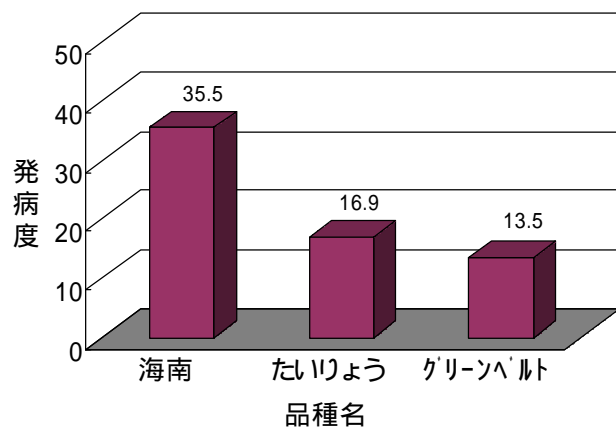


図 - 5 ニラ白斑葉枯病に対する品種間差 (露地栽培, 調査時期: H11/6)

注) 発病度: 発病程度を指数化したもの

$$\text{発病度} = \left\{ \frac{\text{程度別発病株数} \times \text{発病指数}}{4 \times \text{調査株数}} \right\} \times 100$$

発病指数, 0: 発病無, 1: 数枚の葉に病斑が認められる, 2: 多数の葉に病斑が認められる, 3: ほとんどの葉に病斑が認められる, 4: ほとんどの葉に病斑が認められ, 枯死葉も認められる。

3) 発表論文等

北日本病害虫研究会報 (2000年)

試算: グリーンマルチの価格は4,500円前後 (長さ200m × 幅2.7m × 厚さ0.2mm)

トップジンM水和剤の価格は500gで2,500円前後 (包装単位は500g, 250gの3種類)